
物足りない桃太郎

三代渡吉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

物足りない桃太郎

【Nコード】

N8928E

【作者名】

三代渡吉

【あらすじ】

鬼退治を終えて帰ってきた桃太郎。しかし、鬼を退治しただけで、自分の物語が終わってよいものだろうか？桃太郎の新たな旅が始まった。

桃太郎一行が、鬼ヶ島から帰ってきた。

人々を苦しめてきた鬼を全滅させたうえに、奪われた金銀財宝を取り返してきたというのだから、爺さん婆さんも、そして村人も、大層喜んで讃えた。

桃太郎の偉業を讃える人々の声は夜になっても尽きず、一行は二ヤけずにはいらなかった。

その翌日のこと、何故か桃太郎は一人自室で唸っていた。

気になった犬がその理由を聞くと、桃太郎は真剣な顔で答えた。

「僕等の活躍が、こんなもので終わっていいのか？」

「はい？」

「鬼を倒して帰ってきた。みんな幸せになった……そこから、もう僕の活躍はないのか？」

「まあそうでしょうね。だけど、平和なほうが気楽で良いじゃないですか」

「いいや、僕はこれだけじゃ物足りない！」

決断した桃太郎は、勇ましく立ち上がった。

「ちよつと出かけてくる」

桃太郎は、村人の歓声を受けながら、故郷の村を再びあとにした。

昔々あるところに、漁師をしている男がいた。名を浦島太郎という。

浦島太郎は今日も仕事に出たが、するとお気に入りの釣り所で、子ども達が騒いでいた。

よく見てみれば、可愛そうなことに、か弱い亀がいじめられているではないか。

これは一つ子どもを躰けてやらねばと、浦島太郎は腕まくりしながら子ども達に向かっていった。

しかし、突然浦島太郎は後ろから殴られて気絶した。大木を持った桃太郎が、浦島太郎を後ろから殴りつけたのである。

そして桃太郎は、亀をいじめている子ども達に話しかけるや否や、全員の首をあつという間に刎ねてしまった。

「大丈夫かい、亀さん」

「あ、あ、あ、ありがとうございます……」

「怖かったろう。きびだんだ。食べなさい」

亀は、血にまみれた手で桃太郎よりきびだんごを名物渡されたが、とても食べる気にはなれなかった。

とりあえず、血を拭ってもらおうという意味もこめて、亀は桃太郎を竜宮城に誘った。

それを快く承諾した桃太郎を乗せ、亀は少しビクビクしながらも、念願の竜宮城へ帰り着いた。

桃太郎は、方法はともかく亀を助けたということで、乙姫様から歓迎を受けた。

早速、ご馳走と舞をご覧に入れるということで、桃太郎はワクワクしながら、席についた。

しかし、いざタイやヒラメの舞が始まって、桃太郎は驚いた。

「（なんだここは、化け物だらけじゃないか！）」

乙姫様みたいなキレイな女性が舞を見せてくれるかと思えば、魚がすごい腰を捻りながら踊っているではないか。

確かにそういった女性が何人か踊ってはいるが、メインはやはり魚介類達の奇抜な踊りばかりだ。

「（あの乙姫も、実は化け物が化けた姿なんだろう。化け物達を配下において、近隣の住民から略奪しているに違いない！なるほど、海の中にこんな城を建てられたのにも納得がいくな）」

桃太郎は、そう決めたら一直線という男だった。

彼は、乙姫達が寝静まったところを見計らって、亀を脅して馬代わりにすると、竜宮城にいた者達を、次々に切り殺した。

血に染まっていく竜宮城で、乙姫と亀は「やめてください」と何

度も懇願したが、乙姫は結局斬り殺されてしまった。

静かになった竜宮城で、桃太郎は早速財宝を全て風呂敷に包むと、亀を脅して地上へ戻った。

亀は、仲間達と故郷を一度に失って、悲しみに暮れてボロボロ泣いていた。

しかし、そんな彼に対しても、桃太郎は容赦なく刃を向ける。

「さて、貴様が最後だぞ。この悪逆非道の化け物め！ 成敗してくれる！」

「ひ、ひいっ！」

亀は逃げようとしたが、ここは陸上……しかも砂浜だ。

結局足の遅い亀は、逃げ切ることなど出来るはずもなく、甲羅ごと真つ二つにされた。

全てを終わらせた桃太郎は、近隣の住民に財宝を渡すと、礼には及ばぬと笑いながら、その村を後にした。

台風のような一連の出来事に啞然としていた浦島太郎だったが、彼はふと不思議な箱をみつけて、それを開いてみた。

村人は、全員ヨボヨボの老人になったかと思うと、みんな老衰で死んでしまった。

小さな村は、人っ子一人いなくなった。

「いやあ、また良いことをしたなあ」

また村人達にほめられて、桃太郎は満足気だった。

が、自慢話ばかりで面白くないのは、犬だ。

すぐさま犬は、桃太郎に不服を訴えた。

「いきなり出て行ったかと思えば、そんなおいしい活躍をしていたなんて、私も連れて行ってくださいよ！」

「おおそうか。ではまた旅に出ようじゃないか」

桃太郎は、一度決めたらそれからの話は早い性質だ。

旅支度をする、今度は犬を連れてまた村を出て行ってしまった。

子どもに恵まれぬ老夫妻は、毎日神に祈っていた。自分達に、子どもを授けて欲しいと。

するとある日、驚いたことに二人は子どもを授かった。

大層二人は喜んだが、生まれた子どもはなんと身体が一寸にも満たないような、小さな小さな子どもだった。

指で摘めば簡単に潰れてしまいそうな背をしたその子は、そのまま大きく成長することはなかった。

二人は彼を一寸法師と名づけ、大切に育てた。

ある日、一寸法師は都に行きたいと言い出して、御婆さんに御椀と箸と針と麦藁が欲しいとねだった。

身体の小さい彼は、御椀を船に、箸を櫂に、針を刀に、そして麦藁を針を収める鞘としたのだ。

意気揚々と出た一寸法師は、川を下って山を越えていくうち、立派に京へと辿り着いた。

ここが京か、と感動して声をあげたのが、彼の最期であった。

一寸法師は通りがかりの旅人に潰され、若くしてこの世を去ってしまった。

「おお、ここが噂の京か」

旅人である桃太郎は、感動のあまり大きな声をあげた。

「京には裕福で立派な家があると聞きます。どこかの家にじっくり仕えて、我々が必要となる時を待ちましょう」

犬の提案に同意した桃太郎は、早速京の中でも相当立派であると称される家に頼み込み、そこで働くようになった。

今まで戦いばかりだった桃太郎は、雑用ばかりの毎日は退屈だといいいながらも、実はこれも悪くないと心の底では楽しんでいた。

そんな平和が続いていたある日、家の娘さんが突如現れた鬼に襲われた。

ここは正に、桃太郎の出番だ。

「鬼退治とあらば、この僕にお任せあれ。エエエエイヤッ！」

鬼の聖地とも呼べる鬼ヶ島において、住んでいた鬼を全滅させて

いた彼にとって、鬼など赤子の手を捻るも同然だった。

ぐうの音も出ないほどに叩きのめされた鬼は、とうとう観念して「打出の小槌を渡すから勘弁してください」と命乞いをした。

桃太郎は、打出の小槌を一度は受け取ったが、やはり信用出来ぬと鬼を叩き切った後で、京より奪われた財宝を取り返した。

娘を助けた帰り道、ふと桃太郎は小槌を眺めて、犬に言った。

「この小槌がどういうものか、試したい」

「やめてください。変なものだったらどうするんですか」

しかし、効果の分からぬものをいつまでも持っていられるほど、

桃太郎は我慢強くなかった。

桃太郎は、結局犬の同意も得ぬまま、小槌を犬に向かって振ってしまった。

するとどうだろう。驚いたことに、犬は小槌の力によって、立派な馬ほどの大きさになったではないか。

大きくなった犬に驚きながらも、桃太郎はこれで念願の馬に乗れると大層喜んで、娘に小槌を預けると、犬に跨って悠々と故郷へ帰っていった。

「というわけだ。二度目の鬼退治、僕にとっては朝飯前であった」

「流石は桃太郎さん。私は少し感動しましたよ」

と、旅の話を土産に持って帰ってきたのだが、面白くないのは猿と雉だ。

「オイラ達がちょっと留守にしている間に、二人で楽しんで、そんなのはあんまりだ。犬なんてそんな大きくなっちまって」

猿が甲高い声をあげながら文句をたれた。

「俺だってそうだ。故郷の山に帰っているうちにそんな……俺達は仲間でしょう？」

雉は、自分達は裏切られたということを心底訴えた。

流石の桃太郎もその剣幕には押されて、ではまた旅に出ようと二人を宥めた。

鬼ヶ島を制した一行が勢揃いし、もはや敵なしといった様子で、また旅は始まった。

山で木を切っていた御爺さんは、ふと切り株で一休みしていた。そして、昼飯にと持っていた御婆さんのおむすびを今のうちに食べてしまおうと、その包みを開けた。

すると不覚なことに、手を滑らしてしまった爺さんは、せつかくのおむすびを落としてしまった。

おむすびころりん、すつとんとん。

しかしこれは幸い。丁度通りがかった旅人の桃太郎が、大切なおむすびを拾ってくれたではないか。

御爺さんは、馬ほどの巨体を持った犬と、ついでに猿と雉を率いている桃太郎の奇怪さに驚きながらも、深く礼を言った。

「ああ、ありがとうございます」

「このくらいのこと、大したことではありませぬ。それより、おむすびだけでは身が入らないだろう。このきびだんごを差し上げよう」

桃太郎は、御爺さんに惜しげもなくきびだんごを振舞った。

御爺さんは、この上ないほどの礼を言うと、また切り株へと戻っていった。

しかし、その一部始終見ていたのが、陰険な隣の爺さんであった。あのきびだんご、なんと美味そうなことだろう。これはなんとしても手に入りたい。

隣の爺さんは、その先の川のほとりで待ち伏せすると、同じようにしておむすびを落とした。

当然、桃太郎はそれを見つけて拾い上げた。わざとらしく礼を言った隣の爺さんは、わざとらしく「きこりの仕事は骨が折れる」と愚痴った。

なるほどそれは大変と、老人を哀れに思った桃太郎は、きびだんごを一つ惜しげもなく渡した。

だが、そこでケチで傲慢な性格である隣の爺さんは、満足しない。

それだけ持っていながら、一つしかくれぬのかと散々喚き散らしたかと思うと、隣の爺さん鬼のような形相で、桃太郎達に襲い掛かってきた。

隣の爺さんは、そうやって驚かした隙に、きびだんごを全て奪い取ろうと画策していたのだが、その顔がまずかった。

鬼を見たら黙ってはいらぬ桃太郎は、隣の爺さんを人に化けた鬼と勘違いしたのだ。

「オオオオッ！」

そして桃太郎は、勇ましい掛け声とともに、一撃で隣の老人を腰から真つ二つにしてしまった。

流石は鬼退治にかけて、右に出るものはいない男である。

「恐ろしい鬼だ。先ほどの心優しい老人を見て、僕達を油断させるために年寄りに化けたのだろう」

「まったく、どこの世にも鬼は蔓延っているものですね。恐ろしいことです」

犬がため息をつきながら言った。その言葉に、桃太郎の心は燃え上がった。

「そうだ。この世にはまだまだ鬼がいるはずだ。竜宮城とかいう海底城にも、化け物はたくさんいた。京にもここにも鬼は出た。僕達は、まだまだ本当の役目を果たしきれていないのではないだろうか？」

「では、オイラ達の旅の目的が、改めて定まったというわけですね」
猿がそう聞くと、桃太郎は深く頷いた。

「この桃太郎。この世に悪があるかぎり……苦しむ人々がいる限り、この身尽き果てるまで、戦い続けるぞ！」

新たな旅の目的が出来た桃太郎一行は、意気揚々と旅を再開した。

一方桃太郎の故郷では、残忍な狸が村人を皆殺しにし、それを煮汁にして食ったあげく、金銀財宝を奪って山へ帰るところであった。

（後書き）

ふと思いついて、ダーっつ書いてしまったお話。

簡潔に書くことを目標としていたのに、書くうち書くうちどんどん長く、そしてくどくなり、結果二千文字を目標としていたのに五千文字近くなってしまいました。

次は千文字と制限して書くことにします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8928e/>

物足りない桃太郎

2010年10月8日15時53分発行